

ちよつとエッセイ⑦ く地域の姿と課題Ⅱの受講生へ感謝の思いく

令和三年八月九日

宇大で再び学び始めてすぐの頃、主指導教授である中村祐司先生から七月の予定を確認された。令和三年七月七日(水)十四時二十分から十五時五十分(に都合がつけられるかと言う。地域デザイン科学部のオムニバス形式の講義でゲストスピーカーを依頼されました。初めは、気軽に「今から予定しておけば、仕事の都合は何か付けますので大丈夫です!」と言ってしまった。ん!…まで、宇大の四コマ目の時間帯ではないか…。

これまでの経験上、私が何かに本気で取り組もうと思う時には結構あることで…幾つかの新展開が同時にやってくるんです。令和三年度は宇大の武道の授業が剣道実技の年でした。一昨年まで担当していた先生が都合で続けられず、私が担当させていただくことになっていました。それがまさに、水曜四コマだったんです。慌てました(汗)。中村先生に事情を伝えて、お詫びをしに行くと…先生は、「それは非常勤を最優先で、こっちは事前録画しておくなど何とか対応を考えます」とおっしゃった。正直、その時点では、何をどうするおつもりなのか?私にはイメージできませんでした…。

それから、二ヶ月ほど経ったとき、当日資料の作成依頼がきました。初めに二十分程度の講話(経験談等可)、その後、受講生に問いを投げかけ、問いに対する受講生同士の議論の後、受講生の皆さんが議論の結果を発表する。そして、最後に問いに対する私の回答(十分程度)という流れで一コマ分を考えられているということで、やっとイメージが湧きました。この構想を具体的には、どのような方法で実施するのだろうか。受講生の反応がわからない中で講義など経験がない。まさに、初体験である。六月末の夕方、陽東キャンパス十一号館で事前収録を行なった。結構緊張しました。

これまでの経験では、授業は対面以外に行なったことがない。自分が話したことに對する生徒たちの反応を見ながら修正し、授業を組み立てることが出来るようになり、同じ單元でもクラスの雰囲気を見つつ、少しずつアドリブを入れたり、生徒に問いを投げたりしながら五十分の持ち時間を何とか乗り切る日々でしたので、皆さんの反応を見ることが出来ないことが、こんなにも不安なことかと改めて思い知ることになりました。私の「部活動は学校に必要か?」という問いに對して議論する皆さんの姿を見ることが出来ない中で私の答え。不安しかありません。実際の七月七日、水曜四コマがどうであったのか?ずっと気になっていました…。

そう…私はその時、峰キャンパスで実技の授業をしているのです。不思議な感覚でした。峰キャンパスで実技をしながら、陽東で皆さんに出会う?もしかするとウィズ・ポストコロナ時代には、よくある出来事になっているのかも知れませんね。何れにしても、この妙案を前向きに進める中村先生のポジティブさに圧倒されました。先日、先生から受講生の皆さんの感想が届きました。実に二十頁にわたる分量に驚きました。私の拙い話に對する皆さんの誠実なメッセージを心から有難く、かつうれしく思います。ひとこと一言、誠実に目を通したつもりです。皆さんからのメッセージに對して、私なりの思いをお返ししてみたいと思います。(〇は、皆さんのコメントを契機に感じたことです。)

〇アイデンティティーを「自分らしさ」として読んでくれた学生がいます。そうですね。自分らしくなければ持続不可能ですね。多くの自分らしさを共存させることが人間の幅を広げるといふ視点をいただきました。発見です。

○学校に通うモチベーションは部活動が占めていたという学生もいます。私もでした。今の自分の本体は間違いなく部活にあります。教師になり、部活が嫌で学校に行きたくない生徒との出会いもあり、自分を見直す機会となったんです。いい学校でいい仲間、指導者に出会ったのですね。もし、あなたが子供たちを指導したなら、その子たちは幸せです。

○自分の学生時代をなぞる指導者とのギャップが広がっている可能性から、生徒・教師・行政をつなぐ新たな立場が必要であるとするメッセージにハツとする。とかく凝り固まった頭では既存のアクターで何とか解決しようとする。この視点は有難い。

○二十年もすれば、自分の子供が中学生になるころかも知れない。そう思うと興味深い。」という学生もいました。未来を自分に身近なものとして引き寄せるセンスにあっばれです。

○指導者の「まる適」判定！二十年後には可能かもしれない。そのためには信頼性の高い判定指標の開発がカギになると思います。着手すべき課題であると思います。ありがとうございます。

○部活動の指導手当がないことへの驚きを述べてくれた学生さんがいます。現状も少しはあるんですが、割に合いませんね。ウィン・ウィンを求める政策を模索していく必要がありますね。ここには、公共的議論の土壌を形成する必要性を感じます。これは私の仕事なんですよ。

○能動的朝の話に反応してくれた学生がいます。私も宇大生の頃は、ダメダメです。お話ししたように、下級生の頃は講義に行ける時間には起きませんでした。前日の不摂生で部活に間に合えばという毎日……。ここ最近です。年のせいか夜起きていられないことが多く、昔、祖父がお休みと言う時間の早さが信じられませんでした。同じくらいに布団の上(笑)なんです。

○現場を知らずにたてられる政策に関する疑念を書いてくださった学生さんたちがいます。そもそも、那須野さん、もつと頑張つて!!という声だと思えます。そもそもが、学校で仕事をすることが本意です。学校に戻れないこと以外、別に怖いものはないんです。だから、煙たがられてもやるしかないですね。ありがとうございます。

○厳しい指導の先にある勝利というフレーズに共感します。勝利を本気で目指すならば、厳しいトレーニングは必須です。厳しい指導とは何か？優しさとの関係は？私の考える優しさは、生徒にとって決して楽ではなかった。その先にある勝利も敗北も自分自身に返すという優しさ？誰のせいにもできない結果の受け入れを、生徒にも、私自身にも要求することに徹すること…。

○運動部活動における「教育と競争」の調和する着地点は永遠に見出せないとした私の考えに共感しつつ、スポーツにおける競争を教育の一環として認める人と認めない人というのはおそらく一生分かり合えないと述べてくれた学生に感謝します。この現状を、この両極をどう共存させるかを見つめる視点をもらった気がする。本当にありがたい。

○引退後の虚無感に触れた学生もいた。小中高と部活を続け、大学受験を機に引退をしたとき、不思議な虚無感を覚えたという。私もです。毎日行くはずの場所がない？あっても行くべき場所ではなくなる瞬間でした。でも、今思えば、行っても受験結果にそう大きくは影響しなかったかも知れない。三年生が行きたくなったら、ふつと行ける部活であるべきかと数年前から思います。ちょっと稽古がしたくなって道場に行けば、自然体で稽古ができる…部活動はそんな場所でありたいですね。